

序論：人間生存の理法について

武見太郎



「生命のしくみ」は永久に科学者の課題であろうと存じます。私は、本シンポジウムの Introductory Remarks といたしまして、臨床医学と医学的な人類生態学の立場から私見を述べてみたいと存じます。

臨床医学におきましては、Integrity を基盤といたしまして人間をとらえております。同時に、人間が、単独生存を許されない事実を認めなければなりません。そこに社会との関連において個体を考える社会医学の理論が発生するのでございます。しかし、社会を、人間がその中に生存している環境の特定のものとして、これをとらえます時に、Human Ecology の中に包括することも可能であると考えます。この場合、人間個体をひとつのフィードバックの機構として考えなければなりません。

臨床医学における Individualität の問題は、これらの条件の中で形態・分化・機能の問題として、また、Persönlichkeit あるいは Krankheitsform の問題へと発展するものと考えております。

近代臨床医学の問題として、初めてこれを病態生理学の立場から説きましたのは、ドイツのハイデルベルヒのルードルフ・クレールで1938年に初めていたしました。また、医学的な人類生態学として、公衆衛生学と臨床医学を統合的に体系化を企てましたのは、ケンブリッジのレスリー・バンクス教授でございます。その後の発展といた

しまして特別に記すべきものは、Human Behavior の研究が大きく新しく臨床医学へ導入されたことでございます。また、生物リズムの考え方が自然環境のリズムとの関連で追求されたものが、Behavior の問題との関係をもったことになったものでございます。上述の臨床医学におけるマクロ的なアプローチが、ミクロ的なアプローチと共に益々重要な意味が認識されて来たのであります。

地球上における人間を含めての生物の生存の問題を、臨床医学・生態医学・生物学・気象学・地球化学等の立場から総合的且つ基礎的に研究して、人間を含めて生存を安全に保障する可能性を追求するものがライフ・サイエンスだと私は考えます。

人間生存の理法——を考える場合には、生物学的なミクロ的アプローチの重要さは、基礎的な考え方をもつ上に意義があります。たとえば、生命の連続性の基礎には遺伝子が分子レベルで安定であることが重要であります。同時に生物は外界に対し開放されたシステムでありますから、外界の変化に対応して自己を変化させながら、一見不安定に見えながら安定的に自己を維持しているのであります。

クロード・ベルナルやキャノンによって唱えられましたホメオステシスの概念も、今日においては一種の微視的環境論であって、生存の理解への寄与は大きいと言わなければなりません。

分子生物学による遺伝の解明と、生物環境論の積み重ねによりまして、人間社会の特性が社会生物学的に明らかにされてきているように思います。

人間社会がその特色とするものは、まず第一に Sociogenetic 情報伝達のメカニズムは人類社会と密接に関係するものであって、情報が次の世代に伝達されるものでございます。また、子孫によってその情報が受容されるメカニズムが存在することでもあると思います。Sociogenetic System が生物自然環境の中で、人類社会進化の基盤を成すことは明らかでございます。その中に人間的教養が伝達受容されることも経験的事実として知られております。

生物の自己生存を危うくする環境汚染の問題は科学技術の進歩、生産性の向上による生活水準の向上、国民福祉の増大の計画の副次的産物としてはあまりに重大な結果があると考えます。今日、南極の氷の中の酸素は、故中谷宇吉郎博士の研究によれば、500年毎に大きな減少を示しているそうであります。また、工業化による燃焼によります酸素消費量の増大の結果と考えられます。炭酸ガスの空気中における増加は、赤外線を吸収して温度の上昇が海洋に見られるもので、水位の上昇による陸地の危険が考えられる場合も、極端ではありますがあり得ることでございます。また、水蒸気が

凝結して雲となり太陽の照射量を減らすことによりまして、生物体への影響も考えられなければなりません。汚染物質の海水・地下水への侵入による資源的生物の汚染、さらに、放射性物質の海洋投棄による生物の汚染による被害等も無視できません。放射線生物学の進歩によって、放射線による遺伝変異が明らかになってきた今日におきましては、核実験の続行等も将来の人類の生存をおびやかしていると思います。要するに、自然環境の変化が限度を越える場合には、人間による制御は不可能になってしまいます。そこに、生物全体を人間の立場を含めて多元的に、生存の安全を期さなければなりません。

GNPが2倍になりますと精神障害者の数が3倍になることも定説になっております。この中で特殊な精神衛生の施策によって、むしろ10年間に減少せしめ得た事実も知られております。精神公害はGNPとバランスし、都市化公害とも密接な関係がございます。

自然環境の中における社会環境についての精神公害面からの検討は、まだ甚だしく少ないのでございます。物質公害面の対策以上の注目を要するものと考えます。

人間の生存の理法を考えて未来社会を建設するか、局地的、短期的な見方を重ねるかは、人間の生存にとって運命の岐路をなすものだと思います。生物の連帯性を考慮して、ミクロ的アプローチとマクロ的アプローチの総合によって未来を建設すべきだと考えます。ありがとうございました。

